

結 果 の 概 要

1. 概 説

戦後急速に発展向上を遂げた国民の栄養状態は、昭和31年頃を境にして停滞気味の傾向にあつたが、この1～2年は国民所得の向上生活水準の上昇や栄養知識の普及に伴なって穀類、いも類等の澱粉性食品は減少の傾向をみせはじめており、反面動物性食品や油脂等の消費が大巾な増加を示すなど国民の栄養状態は漸次質的な改善の傾向を見せている。

また、栄養不足に起因するとみられる身体症候も僅かながら減少し、青少年の体位も順調に伸びつつける等新しい食事形態を基盤として確実な向上を示しており、国民の食生活はこれまでの穀類中心の食生活から抜けだして欧米諸国並に動物性食品の摂取増という形の新しい段階に進展してきたものと推定される。

— 大幅に増加した栄養摂取量 —

昭和37年度における栄養摂取量は重要栄養素である動物性蛋白質が前年度に比し(+)8.3%、脂肪(+)8.4%、カルシウム(+)2.3%、ビタミンA(+)8.1%、ビタミンB₁(+)5.8%、ビタミンB₂(+)5.5%と総合的に増加し、ここ数年みられなかった著しい変化を示している。

しかし、熱量は2,030カロリーで前年に比べ(−)1.3%、ビタミンCは75mgで(−)1.3%の減少をみせている。

また、昭和45年度の目標値である栄養基準量に比較すると、脂肪、カルシウム、ビタミン類については、まだまだ不足の状態にあり、しかもビタミン類については、調理による損失を全然考慮していないので、実際の摂取量はもっと大きく基準量を下回るものと考えられる。

順調に伸びる油脂類、動物性食品 —

次に食品群別摂取量についてみると前年に比べて、米は(−)3.2%、大麦(−)33.6%、いも類(−)16.5%と減少し、油脂類、動物性食品は、いずれも大きな伸びを示し、特に動物性食品は獣鳥肉類卵類、乳及び乳製品が純摂取量において、(+)6.8グラム、(+)4.7グラム、(+)6.5グラムと増加し最近数年間における最大の伸びとなった。

しかし、野菜、果実類の摂取量は殆んど変化がないか、あるいは若干の減少を示したことは、後述する物価の値上りに多分の影響をうけているものと考えられる。

なお、昭和37年度の食品群別摂取量を、昭和45年を目途とした食糧構成基準と比較すると、肉類は大幅に増加して目標量を上回った結果を示したが、油脂、乳、卵については、目標に対して、なお、30～50%の不足を示し、緑黄色野菜については年々減少の傾向がみえ、目標量の $\frac{1}{3}$ をみたすにすぎない。

— 僅かに減少した身体症候 —

昭和37年度における貧血、口角炎などの身体症候の発現率は20.5%で前年の発現率21.4%を僅かに下回ってよかったが、けん反射消失は9.3%で、前年の8.8%を上回っている。これを業態別に比較すると生産者世帯は24.3%の発現率で消費者世帯の18.3%を上回り、特に口角炎とけん反射消失が引続き高率で

ことが目立っている。

——伸び続ける十代の成長——

この数年来国民の体位は向上し続けているが特に成長期における青少年の体位向上は目ざましいものがあり、昭和37年度においても10代の男女とも身長、体重の増加が著しく特に男子では、12～15才の身長が前年に比べて(+)0.6～2.1cm、体重は(+)0.8～1.5kgと近年にない増加を示した。一方女子の身長は順調に伸びているが、体重については、特に18～20才が前年に引き続き0.66～0.40kg減少した結果がみられた。なお、栄養審議会が発表した昭和45年における体位の推計値と37年度の体位を比較すると、かなり順調な発育を示している。

次に業態別に体位を観察すると身長では前年に引き続き消費者世帯が生産者世帯を上回っている。しかし体重についてみると、男女ともに10代の後半では、消費者世帯の方が生産者世帯に比しその伸びが停滞している結果がみられる。

——食材料費の変動——

昭和37年度の国民平均1人1日当りの食材料費は142,85円で前年に比べると(+)13.7%の増加となっている。またこれを食品群別にみると、肉・卵・乳等の動物性食品や油脂類など栄養的に重要な食品に対する支出額は(+)30.3%、(+)26.3%と、大幅に増加しているが、実際に入手した量もまた(+)12.1%、(+)15.2%とふえ、国民生活水準が向上したことなどのほかに国民が栄養に対する重要性を認識して来た証拠と考えられる。しかし、穀類は前年に比し(+)2.9%、野菜類が(+)8.1%、果実類が(+)25.8%と支出額が増加したにも拘わらず入手量がそれぞれ(−)3.1%、(−)0.5%、(−)5.0%と減少していることは、これら食品の摂取がかなり物価の値上りによって影響されているものと思われる。

次に業態別に1人1日当りの食材料費をみると、消費者世帯が157,28円で最も高く、しかも前年に比べ11.5%増加している。次がその他の世帯の121,25円で前年の(+)10.8%増、最も低いのが生産者世帯の117,37円で(+)10.8%増となっている。また、この数年来の食材料費における消費者世帯と生産者世帯の推移をみると大体同様な傾向で伸びているが、食品群別の支出構成をみると穀類を除く各品目において生産者世帯は消費者世帯をかなり下回っている。

Ⅱ 各 説

A 全 国 成 績

1) 全国1人1日当り栄養摂取量

国民1人1日当りの栄養摂取量は第6表にみられるとおり、この数年は動物性食品と脂肪が若干伸びているものの、他の栄養素は伸び悩みの傾向にあったが、昭和37年度においてはじめて1人1日当りの栄養摂取量のうち動物性蛋白質、脂肪、カルシウム、ビタミン類等重要な栄養素がいずれもすべてこの数年にみられなかった大巾な増加を示したことは注目すべきことである。

しかし、昭和45年の目標値である栄養基準量に比較すると第1図のとおり脂肪、カルシウム、ビタミン類はまだかなり不足の状態にある。